

建築CAD職で車いすの 人たちが働く都心の職場

—株式会社フロンティア日建設計—

職場
ルポ



EMPLOYMENT REPORT

(文)清原れい子 (写真)小山博孝



株式会社フロンティア日建設計

〒112-8565 東京都文京区後楽2-1-3

TEL 03-3818-4954 FAX 03-3818-5058

大手総合設計事務所で
特例子会社設立

東京の都心、JRや地下鉄が交差する飯田橋駅。水道橋寄りにある大きな口の字型の横断歩道橋際に、総合設計事務所の最大手「株式会社日建設」の東京本社がある。

日建設の創業は一九〇〇年。四年後に竣工した大阪府立図書館はいまも現役だ。五〇年に会社設立以来、古くは東京タワー、神戸ポートタワー、東京のパレスサイドビル、世界貿易センタービル等々、その後に東京ドーム、パシフィコ横浜……、最近はさいたまスーパーアリーナなど、日本を代表するさまざまな建築を手がけてきた。スポーツやレクリエーションなどの施設、オフィスビル、ホテル、病院、美術館、官公庁舎……。その名を聞けば、「あつ、行ったことがある」という建物があちこちにある。社員は約一、四〇〇名。

九八年、日建設は特例子会社「フロ



牧村功取締役社長



福田陽一取締役
技術室長兼総務室長

ンティア日建設」を設立した。東京本社二階フロアで、九九年四月に営業を開始、車いすの人五名を含む身体障害者六名が建築CADを使って働いている。賃貸ビルで車いすトイレやスロープなどの改造ができないことと、駐車場の確保がネックとなって、都心には車いすの人たちの職場はまだ少ない。また、建築関係の職場ルボも今回が初めてだ。

フロンティア日建設の社長は、日建設執行役員で東京副代表の牧村功さん。日建設現会長の牧英二さんが社長るとき、障害者雇用が法定雇用率を満たしていなかったため、特例子会社を設立しようという動きがあった。

「会社に歴史があり、これだけの組織になっていて、企業として本来すべき社会貢献ができないのは恥ずかしいと、かなり前から特例子会社の設立を検討していました。私が人事室長るとき、『提案を』と言われまして、九八年四月に設立しました。

なぜ設立に時間がかかったかという
と、経営トップは、企業としてのリスク

を背負い続けることには躊躇しますから、特例子会社を設立して経営上うまくいくのかが課題でした」
経営会議で、建築のCAD職として障害者を雇用する特例子会社設立の方針が決まった。

「CADができる人という条件で、車いすの人の採用を考えました。足が自由なだけで、上半身は健常ですから、通勤を前提に駐車スペースを完備して、面接のときから『車いすのハンディキャップを除けば、扱いは健常者と同じですよ』と言いつけてきました」

牧村さんは偶然十五年前に、吉備高原総合リハビリテーションセンターの設計に携わっていた。

「そのころは障害者雇用にかかわるには思ってもいませんでしたから、近くにある第三セクターの吉備松下株式会社を見学して、すごい会社があるものだと思っていました。会社の方針を実践するのは組織の一員として当然のことですが、とりかかったら中途半端は嫌いで、実現するまで行こうというのが私の行動指



守屋洸二取締役技術室長

針です。フロンティア日建設も営業開始後三年経ち、レールは敷けて、走っている状態になっていると思います」

入社後の教育が大切

日建設は、建築の設計・監理、都市計画を中心に、建築と都市のライフサイクル全般に関する調査・企画・コンサルティングを行っている。

一つの建物が完成するまでの流れは、まず基本設計のための諸条件を整える「設計前」の段階、概略を決める「基本設計」、基本設計に基づいて工事ができるように図面をつくる「実施設計」、クライアントと施工者との「工事契約」への協力、工事の着手から完成までの「監理」と、さらに完成後の「保守管理」など。そのなかで、フロンティア日建設は基本設計と実施設計にかかっている。

会社の設立準備から立ち上げは、社長の牧村さんと、取締役技術室長兼総務室長の福田陽一さん、総務室主任の古谷知也さんの前任者が行った。



オフィス内
のようす

福田さんは特例子会社数社を見学して話を聞き、インテリアデザイン科がある国立職業リハビリテーションセンターと、東京障害者職業能力開発校で会社説明会を行った。

「日建設では、技術職は大学で専門教育を受けた卒業生しか採用していません

本社地下に整備されている障害者用の
駐車スペース



ん。大学で建築を勉強した障害者はそうはいないと聞いていましたので、即戦力は望まずに、入社後に教育しようと考えました。親会社の人たちと一緒に仕事ができるかが心配でしたが、建築に興味があり、建築のCADをやってみたくて一年かけて採用を行ったが、入社した人たちは、一人を除き建築には素人だった。牧村さんも、その点が心配だった。

「いちばん大きな問題は、技術職は大学で教育を受けた人間でも、会社に入って一人前になるのに十年かかるということです。いまは大学院卒で、いちばん若くても二四歳。それから十年ですから、三五歳ぐらいにならないと一人前にならない。そういう世界です。

私は三段跳びのホップ・ステップ・ジャンプだとよく言うのですが、三年はがんばろうとスタートしました。ちょうど三年経って、グループ内で自立できる組織になったと思っています」

同等に働けるように 環境を整える

当初、牧村さんたちは、飯田橋から一時間ほどの郊外に新しくビルを建設することを考えた。

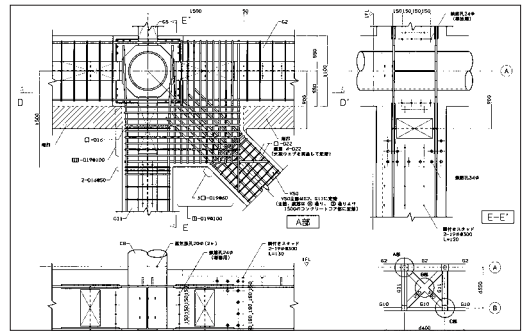
「その話は、本体の設計チームのすぐ近くにいないと仕事がスムーズにいかないことがわかり、立ち消えになりました。設計者と図面を描く人がマンツーマンで打ち合わせたほうがお互い安心できるという人間くさいところがあるんです。

ここは貸しビルですが、幸いなことに建設したときから全部を借りることになっていましたので、オーナーはこちらがこうしたいと言えば、どうぞ改修してくださいという関係でした」

地下の駐車場は、フロンティア日建設



打ち合わせ中の滝澤武彦さん（左）



滝澤さんが担当した大学キャンパスの構造図の一部

「休憩時間は初めは決めていましたが、いまは本人に任せています。仕事の関係で打ち合わせが入ったりしますからね。設計事務所は自分の裁量で仕事をすることですから、自分をコントロールできなければなりません」

特例子会社が親会社から離れたところではなく、本体の中にあるのがいい。

計が七分分のスペースを確保。会長車と社長車が遠慮がちに停まっている。

駐車場とビルとの出入口を電動の引き戸に、ビルの裏口から道路への階段をスロープに、トイレを車いす用にと、設計はお手のも

の。工費は、障害者第一種作業施設設置等助成金などの各種助成金を活用した。車いすの人たちには休憩室が必要だと聞いて、畳のスペースもつくった。

勤務時間も、遠距離の人はラッシュを避けられるようにと一時間ずらし、一〇時から一八時まで、とした。

操業開始三年目で黒字に

フロンティア日建設計の組織は、総務室と技術室があり、技術室は建築部門と設備部門に分かれている。車いす五名と体幹障害一名計六名のうち四名が建築部門、二名が設備部門に所属し、全員がCAD職で、二次元CADで基本設計図や実施設計図を作成したり、三次元CADで建物透視図を作成している。

正社員は一〇名。出向者が一名。CAD職の六名だけでは、こなせる仕事量が少ないので、業務協力者、いわゆる派遣社員二二名が、設計技術とCADオペレータとして働いている。

「操業開始後五年で単年度黒字という計画を立てましたが、二年終了したときに『こんな赤字ではダメだ』と言われ、この一年間でいろいろな仕事を確保して、かなり変わってきました。ほかのCAD図製作会社とほぼ同等の能力に成長してきたと思いますし、そばにいますので、すぐ対応できるというメリットがあります」と牧村さん。

前任者から今年一月に業務を引き継いだ総務室主任の古谷さんの計算では、今年度の

収益は黒字になるそうだ。

取締役技術室長の守屋洗二さんは、操業開始一年後に現職に就いた。

「何も知らない人が、建物の設計のスケッチ下書きからCAD図を完成させていくのは、約束事を覚えるまでに相当時間がかかります。日建設計に信用してもらえないと仕事をまわしていただけないが、みなさんの努力で信用を得てきたと思います」

仕事の納期は厳しい。仕上げの段階では残業をしないと間に合わないこともある。福田さんは、日建設計の社員と一緒に仕事ができるようにと教育をしてきた。「人を育てていくのはたいへんですが、技術的には任せられるぐらいの能力を身につけてきました。それぞれに目的意識をもって、がんばっていると思います。



建築部門で活躍する田代陽一さん



田代さんが作成した透視図

車いすで一日中画面を見ていると、相当の負担になるのではないかと思いますので、健康と自分たちの将来をどう考えていくかが、これからのポイントでしょうね」

日々の仕事を通して CAD職として成長

取材にあたって、担当したCAD図を各自準備してくれた。建築部門では、細かくて複雑な建物の「構造図」、プレゼンテーション用に作成した老人ホームの「透視図」などだ。

滝澤武彦さんは、東京障害者職業能力開発校でOAシステム関係の勉強をしてきた。

「面接では、細かい作業が嫌いではないことをアピールしました。建築のことはまったく知らなかったのですが、最初はかなり戸惑いました。奥が深いので日々の仕事で勉強です。建築士をめざしてがんばりたいと思います」

田代陽一さんは、国立職業リハビリテーションセンター（以下「国リハ」と略す）のインテリアデザイン科で学んだ。「仕事はむずかしいですね。まだまだ勉強が足りないと思います。いろいろ教わりながら、設計者の言うことが理解できるように少しずつ努力していこうと思っています」

大学の建築学科を卒業したのが箕浦季之さん。

「大学で勉強したのは公園などの設計でしたから、建物はゼロからのスタートでした。入社したときはみんなよりできたと思うのですが、みんな覚えが早く追いつかれて追いつけなかったという感じです。将来は設計までできればと思っています」

山田寛美さんは「将来のことまではまだ考えていませんが、会社の居心地はいいです」と話してくれた。

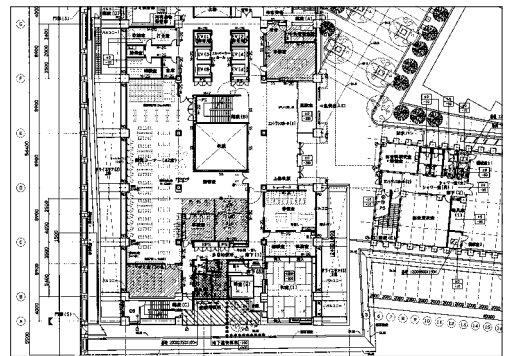
設備部門の二名は電気担当で、照明設備や電気設備の平面図を作成している。国リハで電子機器について勉強した柳瀬健次さんは住み慣れた所沢から通い、勤務は一〇時から。

「通勤はだいぶ慣れました。自分に合っている仕事だと思いますので、続けていきたいですね」



箕浦季之さん（建築部門・体幹機能障害）

春川文広さんは国リハで電気関係を学び、転職した。埼玉県富士見市から一時間半から二時間かけて通勤する。「将来はコンピュータ関係の知



山田さんが作成した高校の平面図の一部

建築設計図には意匠図、透視図、構造図と、いろいろある。山田寛美さんは、意匠図、構造図を担当している



識を伸ばしていきたいですね。特例子会社としての意識がありますから、社員の声も聞いてくれます。改善してほしいところは話し合っていきたいと思っています」
目下の課題は、十分なスペースがある車いす用トイレが一つしかないこと。来年完成する新社屋に移るまでは辛抱しなければならぬ。

これまでに二名が退職した。一人は公務員試験受験のため、もう一人は社会人としてのルールになじめなかった。五月に一名、新人がふえて、障害のある社員

は七名に
なった。

「特別視
はしていま
せんよ」と
牧村さん。

「車いす
に乗ってい
ることを除
けば、一般

柳瀬健次さん（設備部門・電気担当）



の人と同じですから、接し方は一般の人と同じです。技術を身につけて会社の要求に応えられるようになれば、給料をあげていきますよと言いつつ続けています。三年経って力量の差は出ていますが、将来、管理職になる人が出ることを期待しています。そうすれば、社内の雰囲気もまた変わるでしょう。障害者の雇用は、負担に思っていないですね」

今年の第二十六回アビリンピック（全国障害者技能競技大会）から新しく「建築CAD」が競技種目に入る。会場では、フロンティア日建設計の社員の活躍が見られるかもしれない。

自覚・やる気。自分を磨け、と

会社が設立されて三年。特例子会社として、社員に何を求めてきたのか。経営陣の福田さん、守屋さん、牧村さんの意

見を。

福田さんは、「本人の自覚が大切だと思います。まず一人前の社会人になれると言いました。そのベースになる自信をつけるには、自分の技術を磨くことでしょうか。そのためにも、勉強することです。建築の経験がないため二級建築士から挑戦しなければなりません。あと三〜四年で受験資格ができます。挑戦しようと休日に自習したり、学校に通う人も出てきました」

守屋さんは、「最初は業務時間内に勉強しましたが、ある時期から時間外にするようにしました。教育に時間をかけましたが、その人のやる気がいちばん大事です。水辺まで連れて行っても、水を飲まなければ意味がありませんが、水を飲むのは自分だとだんだんわかってもらえました。建築は一級・二級建築士という目標がありますが、設備部門にいる二人

はCADに興味をもち、より深く勉強したいという希望をもっています」

牧村さんは、「私は最初から、『自分を磨け』と言いつつ続けています。仕事に充足感があるかどうかは本人の気の持ちようですから、自分を磨いて自分の技術を高めてほしい。それが報酬として処遇として自分に返ってくると話しています」

再び、福田さん。

「市場価格で競争していますが、コストでも負けません。さらに利益をあげ、このチームを大きくしていきたいって、日建設の仕事に対応していきたいですね。だいたい腕をあげてきましたから、これから親会社のグループの一員として貢献していけるのではないのでしょうか」

車いすの人たちは、駐車場や社内の働く環境が整備されれば（そこが都心ではネットワークとなっているのだが）健常者と同じように働くことができます。

日建設計は、いま飯田橋駅のJR貨物跡地に自社ビルを建設中だ。来年五月には、フロンティア日建設計も入居する。いまより広い車いすトイレも整った、快適な環境のオフィスで仕事ができる日が待っている。



春川文広さん（上）が担当したビルの照明設備の平面図の一部

